

2013年10月4日

## 東日本大震災に伴う洋上漂流物に関する現地調査 結果概要について

### 【カナダ・ブリティッシュコロンビア州現地調査】

- ブリティッシュコロンビア州における現地調査では、主にバンクーバー水族館が取り組んでいる Great Canadian Shoreline Cleanup の Manager である Jill Dwyer 氏、ユクルーレット地区の Environmental & Emergency Services Manager である Karla Robison 氏から、海岸漂着物の状況及び震災起因による漂着物への対応についてヒアリングを行った。
- ユクルーレットの沖合にある Wouwer 島において海岸漂着物状況の確認及びクリーンアップ活動を、在バンクーバーの学生らのグループである Japan Love Project のメンバーと共に実施した。また、バンクーバーのイングリッシュベイにおける海岸クリーンアップ調査活動(9月21日～29日に行われている Great Canadian Shoreline Cleanup。カナダでは、国際海岸クリーンアップ ICC の名称を用いていない)において Japan Love Project のメンバー及び日本人留学生と共に参加した。
- 2013年3月頃より、ユクルーレット周辺の海岸には、震災起因による木造家屋の角材等が漂着しはじめており、地区内及び周辺の3ヵ所に仮保管されている数量は、合せて約40本程度であった(現地調査写真1及び2)。角材の寸法や構造の特色から日本の家屋のものであると特定している。  
また、「山元町」の刻印がある土地区画標識用のプラスチック杭があった(写真下)。



- ブリティッシュコロンビア州北部のハイダグアイには、スタイロフォーム(発泡スチロール)が大量に漂着している。

- Great Canadian Shoreline Cleanup では、震災漂流物の漂着に備えて回収活動に携わるボランティアを公募し、約 2,000 名が登録されている。
- ブリティッシュコロンビア州の沿岸域における対応に向けては、連邦政府、州政府、地方自治体関係者、NGO、研究者らで構成する「津波がれき調整委員会」(British Columbia Tsunami Debris Coordinating Committee) が組まれている。
- 日本からの見舞金の使途については、津波がれき調整委員会へ提案が出されたプログラムについて、検討、配分していく予定である。2 年間に渡る回収活動等の取組み事業に対して見舞金の半分を充て、残りの半分については緊急対応用の予備費とする。
- Karla Robison 氏は、見舞金により漂着した建材によるモニュメントの制作やフォーラムの開催など、回収活動以外の事業も検討したいとしている。
- 国立公園管理局のレンジャーであり漂着物アーティストでもある Pete Clarkson 氏は、震災起因漂着物に係るドキュメンタリー映画の制作にも関っており、10 月中旬には関係者らと被災地を含めた訪日の予定がある。来日に際しては、JEAN をはじめ、今回の現地調査に参加したメンバーが側面的にフォローすることを伝えた。
- 現地調査等に参加した Japan Love Project は、震災直後からバンクーバー市内で被災地への募金活動を始めた学生ボランティアのグループであり、震災起因漂流物の漂着が報じられてきたことから、2013 年 3 月及び 5 月の 2 回にわたってユクルーレットにおいて海岸クリーンアップ活動を実施している。尚、地元の日系企業は、Japan Love Project への活動支援に留まっている状況であるとのこと。
- 今後、震災起因漂流物の大量の漂着が生じた際には、本現地調査等において関係が構築できた Karla Robison 氏、Jill Dwyer 氏及び Japan Love Project と連携し、協力態勢を整えることが有効である。

#### 【 米国・ワシントン州現地調査 】

- 荒天による強風・高波のために、海岸での詳細な調査は実施できなかった。  
海岸には、多くの流木が漂着しており、近隣の川から流れてきたものであるとのこと。
- NGO であるワシントンコーストセーバーズの Jon Schmid 氏、サーフライダーファンデーションの Ken Campbell 氏、NOAA の Nir Baemea 氏、Heidi Pedersen 氏、Liam Antrim 氏からヒアリングを行った。

- オーシャンコンサーバンシーが主催する ICC について、ワシントン州の南部では以前より参加の実績があったが、北部では今年初めて実施された。実施できなかった理由として、北部海岸では先住民の居住区や国立公園が多く、海岸への立ち入りが困難であったり、アクセスが難しい場所が多いことや資金難を挙げていた。今年は、オーシャンコンサーバンシーなどからの資金援助を得られたことから、初めて ICC に参加した。また、先住民の部族からも参加があった。
- 東日本大震災の津波発生直後より、流出した漂流物が流れてくるのではないかとの懸念があり、住民等からの問い合わせも多かったとのこと。
- 2012 年の 6 月頃に、発泡スチロール片などの大量漂着があり、それまではほとんど見られない漂着物だったことから、津波に起因するものと判断された。
- 2012 年 12 月に、青森県の三沢から流出した浮棧橋が漂着した。漁業者からの連絡をうけて、現場に確認に行くまでに、アクセスが困難な場所であったために数日を要した。浮棧橋は海岸に接近した際に、岩にぶつかって一部が破損していた。移動回収についてはいくつかの方法が検討されたが、切断してヘリコプターで搬出する方法が取られた。切断と搬出作業は 2013 年 3 月に実施され、数日間かかった。コンクリートで内部が 8 つに仕切られており、内側に流しこまれている発泡スチロールを掻き出す作業を行った。撤去費用の多くを、日本からの見舞金で賄うことができたとのこと。
- Ken Campbell 氏は、カヤックを用いてアクセスの困難な海岸や無人島などを回り、漂着物の状況などを調査した。はじめて調査が行われた島もある。調査の記録ビデオも販売されている。多くの場所に、日本から流出したと思われる発泡スチロール製のフロートや断熱材、漁具が漂着していたとのこと。
- ワシントン州北部の海岸は、先住民の居留地や国立公園であるため規制が厳しく、漂着物の搬出にボートやヘリコプターを使用することが出来ない地域も多い。
- 2013 年の春ころから、木造家屋の角材等（柱や梁のようなもの）の漂着が確認されており、その一部は漂着物収集家のもとで展示されている。
- NOAA からの助成金により、北部海岸一帯の数十箇所で、毎月一回海鳥と漂着物の調査を実施している。調査員の多くは、仕事をリタイヤした年配のボランティアらで、NOAA が作成したフィールドガイドに従って実施している。

以上